

2026年度 FID バスケットボール

日本男子・女子代表チーム 第1次強化合宿

JAPAN
BASKETBALL

< 報告書 >



一般社団法人日本 FID バスケットボール連盟

2026年度 FID バスケットボール日本男子・女子代表チーム 第1次強化合宿 報告

■事業概要

1. 実施目的

- 1) 本年 11 月に開催予定である Virtus Asia-Oceania Games 2026 に向けたチーム強化
- 2) 選手自身が取り組む日常のトレーニング及びパフォーマンスの成果の検証
- 3) 大会派遣に向けたエントリー選手をトライアウト形式で選考

2. 実施期間

2026 年 5 月 2 日（土）～ 5 月 5 日（火・祝）

3. 実施会場

清水ナショナルトレーニングセンター 〒424-0105 静岡県静岡市清水区山切 1487-1

4. 宿泊会場

同上

5. 参加者一覧

<スタッフ 21 名>

役職	氏名	都道府県	所属
代表チーム強化責任者	原 美子	福島県	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
男子ヘッドコーチ	小川 直樹	神奈川県	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
男子コーチ	吉田 直樹	神奈川県	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
男子コーチ	大川 達也	北海道	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
男子コーチ	工藤 義教	新潟県	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
男子コーチ	木下 直哉	大阪府	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
女子ヘッドコーチ	一松 倫子	神奈川県	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
女子コーチ	花輪希美圭	山梨県	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
女子コーチ	猪崎 智子	神奈川県	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
女子コーチ	齊藤 桃子	神奈川県	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
ドクター	宮崎 伸一	東京都	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
アスレチックトレーナー	磯崎 広大	東京都	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
トレーナー	山崎美和子	静岡県	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
トレーナー	杉本 将	静岡県	(株) ENTAMEDICAL
アスレチックトレーナー	海野 祐生	静岡県	スポーツ堂整骨院
スポーツナース	原田 彩加	静岡県	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
チームオペレーション (総務・広報)	大沼 弘法	東京都	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
チームオペレーション (広報)	氣田 陽介	東京都	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
チームオペレーション (総務)	吉田 朋代	神奈川県	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
チームオペレーション (総務・強化)	吉田 通子	福岡県	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟
チームオペレーション (財務)	関 圭子	神奈川県	(一社) 日本 FID バスケットボール連盟

<男子選手 12 名>

氏名	年齢	ブロック	都道府県	所属先	所属チーム
高山 晃	35	関東	神奈川県	(株)いなげや横浜西が丘店	YOKOHAMA MAJORS
末永 健翔	25	九州	福岡県	ストレッチアップ福岡	HEROES
平塚 天清	27	九州	宮崎県	(福) MAG エデンの園	ブルーホーク
中嶋 高志	26	九州	福岡県	(株)オーリック	HEROES
山本 哲平	19	近畿	大阪府	すみでんフレンド(株)	NANIWARS
滝沢 悠太	19	北海道東北	北海道	札幌スポーツ&メディカル専門学校	SAPPORO RISE
中野 羽琉	18	東海北信越	新潟県	アップルススポーツカレッジ	新潟ライジングサンズ
横山 悠太	19	九州	佐賀県	(株)機動開発	佐賀県 FID バスケットボールクラブ
阿部 凌	22	関東	秋田県	JUKI 産機テクノロジー(株)	クラージュ秋田
小池 瑛斗	24	東海北信越	長野県	にじいろきつぱらいふ篠ノ井	CHIKUMA NEW HOPES
羽形 大海	20	関東	東京都	(株)カクヤス	BLAST TRIGGERS
関口 大我	24	関東	東京都	(医)同潤会 富士見病院	OTP

<女子選手 6 名>

氏名	年齢	ブロック	都道府県	所属先	所属チーム
岸 カイラ	26	関東	神奈川県	第一三共ハピネス(株)	藤沢ウイング
宮本梨々奈	22	九州	沖縄県	(株)サンエー	沖縄県 FID
徳山 未来	22	東海北信越	愛知県	ゼビオ(株)	豊田クラブ
塚本今日香	24	東海北信越	静岡県	(株)ジャパン・スリーブ	静岡クラブ
田中 優香	19	東海北信越	長野県	(学)高松学園 飯田短期大学	CHIKUMA NEW HOPES
奥原 彩花	20	中国四国	山口県	東洋パックス(株)	TAC 田布施アスレチッククラブ

■全体スケジュール

	5/2	5/3	5/4	5/5
午前	・会場設営 ・集合	・練習 ※男子 vs 韓国	・練習	・練習
午後	・全体ミーティング ・練習※男子韓国合同	・練習	・練習 ※男子 vs 社会人	・全体ミーティング ・解散
夜間	・身体測定 ・シューティング	・シューティング	・シューティング	





日本代表チーム
強化責任者 原美子

【全体総括】

先ずは大きな怪我や病人が出ず、無事に合宿を終えることができて安堵している。それは、まだまだ各種感染症のリスクも懸念される中、他団体等と接触せず、同施設内で練習～食事～宿泊ができ、トレーナールームや入浴・洗濯等の設備も整った中で、練習に集中できることが最大の要因である事に感謝したい。また、体育館にも空調設備が整っており、熱中症対策が取れたことも有難いことである。

合宿に先立ち、全体ミーティングが行われ、小川ヘッドコーチから、FID バスケットボール男子・女子日本代表チーム〈活動方針 2026〉について説明があった。

今回の第 1 次合宿は、11 月にタイ・バンコクで開催予定の[2026 Virtus Asia-Oceania Regional Games-3×3 Basketball Championship-Incorporating the VIBF 3×3 World Cup]に向けて、世界一になるための日本独自の戦略を策定し実行することを目標に、代表選手を選考する大切な合宿であり、どのような方針で評価されるか、評価のポイントについて説明がなされた。選手たちは、代表選手としての自覚を持つことへの重要性を感じながら聴いていたようである。尚、今大会より、世界ランキング制を導入することが決定している。

男子は、韓国ソナン市のバスケットボールチームが来日し、合同練習やスクリメージで交流することができた。熱心なコーチ陣と協会長、理事、保護者の方々と、互いに、アジア地区の ID バスケットボールの普及・強化に協力・尽力することを確認し合うことができた。また、韓国は、自治体やバスケットボール協会から報酬を得ながらコーチ活動ができるとのことで、日本がボランティアで、ここまでの活動をしていることに驚きを感じているようだった。今後、交流を継続していきたいと考えている。

3 日目には、地元社会人チームとの 5×5、3×3 のスクリメージで確認することができた。元プロ選手として活躍されていた方もおり、充実した練習になった。ご協力ありがとうございました。

女子は、6 名で、コーチ陣と、より実践的な練習を行った。それぞれに、お互いの得意なところを認識しており、それがプレーに出ているようである。また、コミュニケーションが取れるようになってきて、プレー中も以前より声が出てきているようである。部屋割りで 6 人同室が功を奏したようである。

3 日目昼食後に強化委員会を開催し、一松コーチから、アジア・オセアニア大会、JC 大会、3×3 大会、選手の情報共有資料について提案・協議された。

期間中、多くの方々に視察・激励していただいた。2 日目に、今年度 FID ジャパン・チャンピオンシップバスケットボール大会を静岡県富士市で開催することになっており、（一社）静岡県バスケットボール協会専務理事三浦昭彦様、NPO 法人静岡 ID バスケットボール連盟理事長男城幸枝様がお出でになって下さった。また、ご協賛いただいている地元企業株式会社ドリームビレッジホールディングス代表取締役伏見修様が、執行役員山下将宏様やご家族の方と見学・激励に来て下さった。選手たちの練習をご覧になり、技能の高さや目前で展開されるプレーのスピード感や迫力に再度感動されていた。これからも、静岡の ID バスケットボール競技の発展に御協力頂けるものと確信する。今年度、社会貢献活動プロジェクト「88SMILE」としてパートナーシップ締結して下さった（株）はちのち代表 湊谷安玲久司様、橋本竜馬様、事務局畔柳理恵様も激励に来て下さった。湊谷様、橋本様より激励のご挨拶をいただき、記念写真も応じて頂いた。また、（公社）ジャパン・プロフェッショナルバスケットボールリーグ常務理事増田匡彦様が見学にお出で下さった。

今回男子メンバーの保護者の方々は、熱心に全日程見学されていた。日本代表の活動へのご理解と選手本人の成長に心強くサポートして下さることを期待したい。

コーチのみなさんには、日々選手達の報告や、適宜オンラインによるトレーニングの指導を行って頂き感謝いたします。アスリートとして自ら生活を管理するのは難しい選手達にとって、高い目標に向けて自身のモチベーションを保つことにかなり寄与していると確信します。男子数名は、筋力トレーニングを継続して取り組んできた成果が見られ、プレーにも反映していました。また、トレーナーの方々が、身体のケアをしながら、心理的にもサポートして下さっており選手たちにとっては心強い支えとなっていることに感謝致します。

日本代表の活動は、多くの方々のご理解・ご支援・ご協力があって継続できています。弊連盟の杉本理事を中心に、募金箱を各地に設置していただき、数多くの方々に募金をして頂きました。また、JBF-FID のピンバッジを制作していただき、選手たちに最終日に手渡すことができました。日本代表としての自覚と、多くの方々に応援していただいていることを、より実感できたことと確信いたします。

この活動の成果を発揮する機会が、国際大会です。選手やコーチ・トレーナーの長期間の派遣にご理解ご協力頂いた職場や関係機関の方々に感謝申し上げます。また、ご支援・ご協賛頂いているみなさまに感謝申し上げます。

選手のみなさんは、国際大会で最高のパフォーマンスができるよう体調を整え臨んでください。日本代表としての自覚を持ち、感謝の気持ちを忘れず、品位ある集団行動を期待します。日本から全力で応援しています。



日本男子代表チーム
ヘッドコーチ 小川直樹

【男子総括】

昨年のフレッシュマンキャンプに参加をした選手の中から 4 名を代表チームに招集し、計 12 名の選手を対象に今年度の第 1 次強化合宿を実施した。

今年度は 11 月にタイで 2026 Virtus Asia-Oceania Regional Games – 3x3 Basketball Championship – Incorporating the VIBF 3x3 World Cup が開催予定である。3 人制のカテゴリーであるがワールドカップが併催され、昨年の世界選手権並みの出場国が見込まれている。また、今大会から世界ランキング制度が導入され、これは 2032 年のブリスベンパラリンピックで ID クラスのバスケットボール競技の採用を視野に入れた VIBF（Virtus 国際バスケットボール連盟）の施策の一つである。日本も実績を残し、世界のトップレベルに位置できるようにしていかなければならない。

初日の練習に先立ち、男女チーム合同で全体ミーティングを行い、今年度の強化方針を説明。昨年の世界選手権に出場し、世界で戦う厳しさを経験した選手も中には存在するが、改めて厳しい環境下で戦うためのフィジカル、メンタル、スキル等の個人レベルの引き上げとチームの勝利のために自分がすべきことの必要性を訴えた。自己犠牲を払ってまでもチームの勝利を優先するというマインドは特に国際大会では必須である。これは長期間、異国の地で厳しい戦いをするうえで、満身創痍でありながらもチーム（組織）の一員としての遂行力が勝敗に大きく影響するからである。

上記大会にエントリーできるのは 5 名であるため、チーム内での競争は熾烈になる。選手の選考・評価ポイントも併せて説明を行った。

2026年度

日本代表チーム 強化方針

目的

男女ともに
2026 Virtus Asia-Oceania Regional Games
– 3x3 Basketball Championship –
– Incorporating the VIBF 3x3 World Cup
にてメダル獲得（世界ランキング上位）

目標

男女ともに
世界一になるための日本独自の戦略を策定し実行

課題

①世界で戦うための肉体改造と意識の改革（フィジカル・メンタル）
②日本人の特性を活かしたプレーの展開（スピード）
③シューティングパーセンテージの向上（スキル）
④チームを想う気持ちと世界で戦うタフな精神力（メンタル）

2026年度

日本代表チーム 選手評価方針

そもそも、活動に参加する前提として・・・

- ・ **バスケットボールが大好き** であること
- ・ **日本代表選手に選ばれる** ことに特別な想いを持っていること
- ・ チームのために **自分が犠牲になっても** 勝利に貢献できること

これらを“すべて”備えている選手を選考する

いくらスキルが高くても、**チームのために** 行動できない選手は、**チームに** 必要ないからです
世界で勝つためには **チームの団結力** が必須であり、**戦う集団（チーム）** を編成するからです

+

< 評価ポイント >

- ①合宿でのパフォーマンス（フィジカル、スキル、メンタル）→日々の取り組みの成果
- ②日常の報告（食事、睡眠、就労、トレーニング、服薬、報告事項など）
- ③オンライントレーニングの出席率

- 4 -

一般社団法人日本FIDバスケットボール連盟
JAPAN BASKETBALL FEDERATION Inc. (players with an Intellectual Disability)

JAPAN
BASKETBALL

- 5 -

一般社団法人日本FIDバスケットボール連盟
JAPAN BASKETBALL FEDERATION Inc. (players with an Intellectual Disability)

JAPAN
BASKETBALL

昨年末、実現できなかった韓国チームとの交流であるが、関係者を含め継続的に調整を続け、今合宿に招聘することが出来た。2 日の午後と 3 日の午前中という短い時間ではあったが、合同練習並びに練習ゲームを実施し、有意義な時間を過ごした。韓国のソナン市障がい者バスケットボール協会に所属する「AIR ATTACK」というクラブチームで、選手 9 名、スタッフ 6 名の計 15 名が来日した。

最初は互いに緊張の面持ちであったが、時間を共有する中で打ち解けあい、日本人選手にとっては非公式とはいえ海外チームとの対戦及び交流がはかれたことは非常に良い経験となった。特にスクリメージでは新たに招集をした阿部、小池、羽形、関口などの選手が積極的にプレーしていたのが非常に印象的であった。

チームスタッフとも会食を含め、盛んに情報交流が行われ、日本、韓国両国の現状を改めて共通認識を持った。同じアジアエリアで活動する両国が、今後交流を継続しつつ、より発展していくことに相互に努力をしていくこととした。また、韓国の代表チームが VIBF の国際大会に出場できるよう、我々としてもサポートしていく所存である。

昨年の世界選手権のメンバーの内、2 名の選手が代表を辞退し、フレッシュマンキャンプから 4 名の選手を代表チームに加えて新たにスタートしたが、今合宿でコーチ陣が目指す内容とは大きくかけ離れたものであったと感じている。内容については以下、コーチの報告を参照していただければと思うが、チームの精神的支柱が抜けたことによる牽引するはずのベテラン、中堅選手たちの戸惑いと、初めて代表チームに加わった選手たちの不安が相まってマイナス要因が増幅し、練習の雰囲気にも多分に影響が生じた。今年度から末永をキャプテンに任命し、ベテランの高山、平塚を副キャプテンとした。末永、平塚は今までは自分のことだけを最優先に考えてプレーをさせてきたが、今後はチーム全体のことも含めて様々な対処をしていかねばならない。そのためにはチーム間での会話を多く取り入れねばならず、常時コミュニケーションが必要となってくる。昨年、世界選手権に最年少にて出場をした山本も、もはや新人ではなく、世界を経験した者として新しく入ってきた選手たちに伝えるべき役割がある。世代交代や、多くの選手が加わる時にはいつの時代もこのような状況になりがちであるが、これも彼らにとっては様々なプロセスを踏む中で、現状課題の克服に取り組むという良き経験となり、円熟すれば大きな力を発揮出来るようになる。また、オンザコートから離れた社会生活上でも活かされる時が必ず来る。人としての成長が出来る必要なプロセスを十分に理解しながら活動してもらいたい。我々も彼らがどれだけ成長出来るかを確認出来るのは非常に楽しみである。

取り組むべき内容が非常に多い今合宿であったが、実戦形式には地元の社会人クラブの方々にご協力をいただき、5×5 及び 3×3 のスクリメージを実施した。5×5 については最後のクォーターで自分たちイメージから崩れ、自滅するシーンが生じ敗れはしたが、それ以外は対等に戦うことが出来た。また、3×3 についても世界を相手にする戦術については整理が必要であるが、選手起用のイメージを持つことができ、今後のチーム編成並びに選手評価と選考に繋げていく。

今合宿期間中に多くの方々がチームに激励を目的に来訪していただいた。2 日の午前中には代表チームのスポンサーである株式会社ドリームビレッジホールディングスの伏見社長より選手に対し激励の言葉をいただいた。午後には株式会社はちはちの湊谷代表とベルテックス静岡に所属する橋本竜馬選手、広報の畔柳さんが来訪された。橋本選手からはご自身の経験から代表の一員として世界で戦う意味と仲間との協調性について選手がイメージしやすい言葉で話をしていただいた。代表歴を持つ現役選手との接点は中々持つことができないため、特に選手にとっては非常に貴重な時間となった。また、(一社)静岡県バスケットボール協会の三浦専務理事、NPO 法人静岡 ID バスケットボール連盟の男城理事長にも来訪していただき、練習を見学された。今合宿にも中央静岡ヤクルト販売株式会社様よりヤクルトの提供をいただき、大変有難かった。

このように多くの方々のご支援ご声援を賜り、我々の活動が成り立っているということを合宿に参加している全ての者が改めて認識せねばならない。この活動環境が当たり前ではなく、様々な人がこの代表チームの

ためにサポートをしていただいているという現実を感じれば、自ずと結果で恩返しをするしかないという答えになる。皆様のご期待に添えられるよう、責任と覚悟を持って今後も精進していく所存である。



日本男子代表チーム
コーチ 吉田 直樹

【所見】

今年度最初の活動となった本強化合宿は昨年度のフレッシュマンキャンプを得て新規招集となった4名を含む全12名が集まりスタートした。また、今回は昨年度2次合宿にて急遽キャンセルとなったアジア諸国との連携強化を目的とした韓国チームの来日が実現し、合同練習やスクリメージを通じて、韓国チームとの連携強化を図ることができた。また、このような取り組みは一過性のイベントとしてではなく、継続（定期的な交流とする）する事でアジアのIDバスケットボールの普及・強化にも繋がると感じた。個人的にも海外チームとの対外的な活動・交流は初めての経験であり、貴重な経験をさせていただくことができた。

また、今年度11月にタイで開催予定の「Virtus Asia-Oceania Game」を見据えて地元社会人チームの方々にご協力をいただき、強度の高い実践練習を実施することができ、メンバー選考に資する貴重な取り組みを実施することができた。

今回も昨年度に続き静岡県清水市（J-STEP）にてキャンプを実施することができ、非常に有意義な合宿となった。

代表合宿自体は昨年12月の2次合宿（福岡）以来の招集となったが、コンディション調整及び向上が実施できている選手、出来てない選手とが顕著にみられた。昨年度のカザフスタンでのメダル獲得に続き、今年度もメダル獲得が最大のミッションであり、最低のミッションとなる。したがって日本の強み（早いトランジション）を活かした戦い方が今まで以上に求められる。その為には継続した各選手の努力が必要不可欠となるため、引き続きフォローしていきたい。ポジション別トレーニングではインサイドを担当、全体的に持久力不足、基本的な姿勢（股関節・膝を曲げた低い姿勢）をとる意識や柔軟性が不足しており、具体的には「トランジションに耐えうる走力及び持久力・自分よりも大きい相手と戦うフィジカル」が最大の課題であると改めて認識した。キャンプ期間中には朝練習にてビッグマンは別メニューを実施。施設の外周（ランニングコース）を活用しラントレーニングを実施した。本キャンプでの取り組みのみでは当然効果は得られず、後、自身でのトレーニングにおいて必要な強度を認識させることを目的として実施、指導した。

今年度からは新たな戦力が加わりとともに、これまで長年代表の主力となっていた選手が抜けたこともあり、今まで以上に選手個々の意識向上、チーム内競争の活性化が求められる。引き続き自身の立場から各選手のスキルアップ・ベースアップに寄与していきたい。ガード・フォワード、インサイドともに、これまで代表にいた選手は今まで以上に危機感を持つ必要があり、この点については今後の活動の中で各々が意識しレベルアップに繋がるべく、来年度以降についても引き続き声をかけていきたい。



日本男子代表チーム
コーチ 工藤 義教

【所見】

FIDバスケットボール日本代表チームの第1次合宿を、静岡県清水市の清水ナショナルトレーニングセンターで実施した。全国から12名の男子選手が参加した。合宿を始めるにあたり、今年度のチームの強化方針について、小川HCから選手に向けて説明があった。昨年度カザフスタンで開催されたVirtus Basketball World Championships（世界選手権）において、男子代表チームは、念願である国際大会での初の銅メダルを獲得することができた。メダルを獲得したことにより、今後、FIDバスケットボール競

技が注目を集めることが考えられる。今年度も開催される予定の国際大会において金メダルを獲得することを目指し、日本人選手の強みを生かしたチーム作り、選手個人のさらなる能力強化を図っていくために、選手に課せられた課題を克服するためのそれぞれが努力することを求める話があった。2032 年ブリスベンパラリンピックでの知的障害者バスケットボール競技の正式種目としての復帰に向けて、選手、スタッフ一同邁進していく覚悟を決める全体ミーティングとなった。

ダブルキャプテンの 1 人として代表チームを牽引してきた選手が、昨年度をもって代表を引退した。チームへの影響力が大きかった彼がいなくなったことで、完全に新チームとしてスタートしたという印象がある。新キャプテンに選ばれた末永選手を中心に、サポート役として高山選手、平塚選手が選ばれ、彼らが代表チームの中心となっていくことになった。キャプテンとして、どうチームをまとめていけばよいか、サポート役としてどうキャプテンやチームを支えていけばよいか、合宿中、悩む場面は多かったと思われる。改善の余地は多々あるが、選手間のコミュニケーションを増やし、年齢に関係なく、よりよい人間関係を築いていってほしいと願っている。

合宿の初日、2 日目は、韓国城南市の知的障害者バスケットボールチームとへの合同練習、練習試合が行われた。パラリンピックでの競技復帰に向けて、アジアの国々の知的障害者バスケットボールチームとの交流の一環として行われた今合宿での練習では、選手同士、スタッフ同士での交流も図られ、初めての交流にもかかわらず、良い関係を築くことができたと感じている。今後、日本代表チームが韓国に遠征することも検討されており、今後の交流も楽しみである。

代表チームとしての練習内容については、大きく分けて、ガード陣とビッグマンのそれぞれのポジションに合わせた課題を改善するためのメニューに取り組んだが、全選手共通の課題として取り組んだのは、体力、走力の向上、アジリティの強化である。

20m シャトルラン（初日、最終日）、3 メン 5 ボール（毎日）、施設の外周ランニング（2 日目、3 日目）などに取り組ませ、選手たちに試合の最後まで走ることができるチームを目指していることを肌で感じさせた。昨年度も代表選手に対しては、走るトレーニングに取り組むことを伝えてきたが、実際に努力してきた選手とトレーニングを怠った選手の違いは、20m シャトルランの数値の差が示す通りだった。今年度、選出された代表選手を含め、体力、走力が自分の課題であると感じた選手は、次回の合宿で挽回できるように努力してきてもらいたい。アジリティトレーニングでは、サイドステップ、8 の字、クロスステップ、シャッフルステップのトレーニングを課した（2 日目、3 日目）。オフェンス・ディフェンス両方に必要な敏捷性を身につけるために、普段のトレーニングメニューに組み込んで、ステップワークを強化してもらいたい。

ポジションごとの練習内容でいえば、ガード陣のオフェンスにおいては、世界の強豪チームの高さを意識して、高さに勝るスピードで勝負する練習を設けた。①スピードにのった速攻を展開し、状況に応じて自ら仕掛けチャンスメイクしたり、先に走っている選手に正確なパスを出して得点させたりする判断力を養う内容。②シュートチャンスの場面で、躊躇なくペリメーターエリアや 3 ポイントエリアから正確なシュートを決めることを目指すシューティングドリル。③ビッグマンのピックを利用してフリーでボールをもらい、自らのシュートや得点につなげる動きの練習。ディフェンスにおいては、高さのある外国人選手に対して、簡単にボールを持たせないようにタイトに守ることを意識したハードワークを意識させて取り組んだ。

一方、ビッグマンにおいては、まず基礎として、自分たちよりも大きな相手と戦えるようにするための体の使い方ができるように、股関節を意識したパワーポジションの習得を目指した。オフェンスにおいては、①ガード陣にピックをかけてフリーになるチャンスを作りながらも、自らもゴール下でパスをもらい、シュートにつなげられるような動き。②積極的なオフェンスリバウンドから得点を奪えるようなパワープレー。ディフェンスにおいては、ペイントエリアに相手選手を入れないコンタクトプレーや、オフボールのマークマンとボールマンの位置関係から適切なポジショニングをすることを意識させて取り組んだ。

日本代表チームとして、高い意識をもって取り組むことが求められる中で、練習による疲労の蓄積からか集

中力を欠いた場面も見られ。その都度、ヘッドコーチやコーチからそれを指摘し、全選手の意識をより一層高められるように指導を行った。3 日目には、全選手が高い意識の中で練習に取り組めるようになってきたのが印象的だった。

【まとめ】

5 月 2 日から 5 日までの 4 日間、清水ナショナルトレーニングセンターにて行われた日本代表合宿が、無事に終了いたしました。全国から集まった 12 名の選手たちにとって、この期間は極めて濃密で、意義深い時間となったと思います。

今年度選出された選手たちにとって、所属チームでの日常的な練習とは異なり、「世界と戦い、そして勝つこと」を唯一無二の目的としたこの合宿は、非常に大きな経験になったはずです。日の丸を背負う覚悟を肌で感じ、選手自身が代表チームでどれぐらいのプレーができるのかを確認する貴重な機会となったのではないのでしょうか。

合宿を通じて、それぞれが克服すべき課題が明確に分かったと思います。次回合宿で顔を合わせる時まで、一回り成長した姿を見せられるよう、各自が所属チームに戻ってからも高い意識で日々のトレーニングに励んでくれることを期待しています。「次こそは、さらに強くなった自分たちになって再会しよう」。その誓いを胸に、切磋琢磨し続けていきましょう。

最後に、素晴らしい環境を提供し、私たちの挑戦を全面的にサポートしてくださった清水ナショナルトレーニングセンターの皆様へ、心より感謝申し上げます。充実した施設と温かい配慮のおかげで、選手・スタッフ一同、トレーニングに専念することができました。今合宿での経験を糧に、世界を相手に全力で戦う準備を進めてまいります。今後もお世話になりますが、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。



日本男子代表チーム
コーチ 大川 達也

【所見】

今年度の強化合宿を、5 月 2 日から 5 月 5 日まで静岡県清水ナショナルトレーニングセンターにて実施した。本合宿は、アジア・オセアニア大会派遣選手および大会直前強化合宿招集選手の選考を目的として行った。

昨年度のフレッシュマンキャンプを経て、新たに 4 名の選手が招集された。また、新主将・副主将も選出され、男子 12 名による新チームがスタートした。合宿では、3 人制競技（3x3）の戦術確認や、スクリーミングを中心とした実戦形式の練習を多く実施し、チームとしての連携や個々の役割確認を行った。

合宿期間中には、多くのスポンサーの皆様にもご訪問いただき、選手たちへ激励の言葉を頂戴した。橋本竜馬選手（現ベルテックス静岡）からは、「日本代表として国を背負うことは、カテゴリーに限らず素晴らしいこと。みんなでその価値を共有し、大切にしてほしい。そして大会だけでなく、自チームに持ち帰って周囲にも伝えてほしい。代表チームを強くしながら、自分たちのチームもさらに良くなってほしい。」との力強い言葉をいただき、選手たちにとって非常に刺激のある時間となった。

今回の合宿では、新チームとしての課題と、今後の成長につながる要素の両方が多く見られた。特に感じたのは、「チームを牽引しよう」という意識を持つ選手がまだ少ないという点である。合宿中には、互いに様子を見合ってしまう場面や、自分のことで精一杯となり、周囲への働きかけまで行動に移せない場面が多く見られた。

チームの士気が下がったときに、「誰かが声を掛けるだろう」ではなく、気付いた選手が率先して声を掛け、危機感を共有し、行動に移していく姿勢が必要である。一人の選手に任せるのではなく、全員が主体的に関わりようとする中で、チームとしての結束力はさらに高まっていくと感じた。また、自主トレーニングについても、

これまでの合宿同様に課題が見られた。選手自身がどのように課題と向き合い、目的意識を持って取り組めるか。そのために、どのようなサポートやメニュー構成が必要なのかについては、スタッフ側の課題でもある。一方で、実際に取り組むかどうかは、最終的には選手自身の意識に委ねられる部分でもある。選手一人一人が自覚を持ち、仕事や学校とトレーニングを両立しながら、継続的に競技へ向き合っていく姿勢を期待したい。

最後に、本合宿の実施にあたり、充実した設備環境と温かいご対応をいただいた清水ナショナルトレーニングセンター関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。



日本男子代表チーム
コーチ 木下直哉

【所見】

今回の代表合宿は、単に練習メニューを消化する場ではなく、年間約 10 日前後しかない代表活動の中で、選手がクラブチームへ戻った後の「355 日の活動」において維持すべき世界基準を提示する重要な機会となった。代表活動は、選手の技術向上や戦術理解を促すだけでなく、世界の舞台で戦うための基準をアップデートし、それを日常へ持ち帰らせる役割を担っている。この観点から、本合宿は“基準の提示”という本来の目的を果たす場として適切に機能したと評価できる。一方で、合宿期間中には一部の選手に戸惑いや判断の遅れが見られた。これは単なる技術的な課題ではなく、クラブチームで求められる役割と、日本代表として世界の頂点を目指すうえで求められる役割との間に生じる乖離が主な要因である。特に FID バスケットボール特有の「一般化（Generalization）の難しさ」が影響し、役割の変化に伴う認知負荷が増大していた。クラブチームでは得点源として自由度高くプレーする選手が、代表ではシステム遂行を重視するロールプレーヤーとしての役割を求められるケースが多い。この役割転換がスムーズに行われず、クラブチームでの“正解”が代表では“誤答”となる状況が混乱を生み、判断スピードの低下につながっていた。以上の点から、今回の合宿は代表基準の提示という目的を果たしつつも、選手が役割の変化に適応するための支援が必要であることが明確になった。

【課題】

今回の合宿を通じて浮き彫りになった最大の課題は、FID 選手に特有の「一般化の難しさ」に起因する役割適応の困難さである。クラブチームと代表チームでは求められる役割や戦術的要求が大きく異なるにもかかわらず、その違いを選手自身が十分に理解し、状況に応じてプレーを切り替えることが十分に行われていなかった。特に、クラブチームで身につけた動きや判断をそのまま代表活動に持ち込んでしまう傾向が強く、代表として求められる役割を遂行するための柔軟な思考やプレー選択が課題として明確になった。

今後は、代表スタッフだけでなく、各ブロック委員との連携をこれまで以上に強化し、地域で活動する選手の情報を継続的に収集していく必要がある。クラブチームでどのような役割を担っているのか、どのような指導を受けているのかといった背景情報を把握することで、代表が求める選手像に合致する人材をより正確に発掘できると考える。また、選手の特性を理解した上で、代表活動における役割の切り替えをどのように支援していくかという視点も重要になる。さらに、チャンピオンシップ大会、全国障害者スポーツ大会、各地で開催される招待試合など、選手のプレーを直接確認できる機会を積極的に活用し、所属チームスタッフとのコミュニケーションを密にしていきたい。普段の練習状況やチーム内での立ち位置、得意とするプレー、課題として取り組んでいる点などを丁寧に聞き取ることで、選手一人ひとりの強みと弱みをより深く理解し、代表活動における成長支援につなげていく。これらの取り組みを継続的に行うことで、選手が代表として求められる役割をより明確に理解し、状況に応じたプレー選択ができるようサポートしていきたい。最終的には、クラブチームと代表の双方で選手がより良いパフォーマンスを発揮できる環境づくりを目指していく。



日本女子代表チーム
ヘッドコーチ 一松倫子

【女子総括】

今年度の女子代表選手の増員はなく、Virtusの登録の関係で昨年より1名減の6名での活動となる。前回の世界選手権では、急遽派遣を断念した選手がいたり、大会中にけがで選手を欠いたりする中で、メダルを獲得するという最低限の目標は達成したが本意ではなく、本合宿は、11月のオセアニア・アジア大会優勝に向けて、チームの強化と派遣メンバーの見極めを目的とした。

得点力とディフェンス力の向上を継続することを目指しながら、ディフェンスにおいては、海外チームの体格差を活かしたプレーに対してのディフェンスを確認し、強化する練習を取り入れた。初日は、女子コーチ相手の10分ゲーム中心のメニューにし、普段5人制の練習や試合を行っている選手が、3人制のプレーの動きや考え方などに切り替わるようにした。また、10分ゲームを行いながら、合宿までの練習やトレーニングの成果や課題を確認した。2日目に、ワールドカップの試合動画を見る時間を設け、動画を見た後に試合内容について発表し合った。選手たちは、客観的に試合を見ることができ、自分自身の振り返りと共に、チーム全体の状態を冷静に見ることができていた。一人ひとりのディフェンスに対する意識は高まってきており、技術も向上してきているので、早い動きの少ない海外のチームに対して、脚力をいかに協力して守れるようになることが次回の大会の勝利のカギとなることを伝え、3日目より男性スタッフの協力を得て、身長差を活かしたプレーに対して二人で協力する守り方や位置取り、その際のローテーションなどを丁寧に確認し、実践練習においても、スタッフにフランスチームを想定した動きに徹してもらいながら練習を重ねることができた。大会前の、あと1回の合宿には、各自で10分間走り続けられる体力と押し負けない体幹の強さ、シュート力を上げて臨んでほしい。そのためには、家族はもとよりブロック委員や所属チームスタッフの方の協力が不可欠であり、代表チームに対する理解や協力を得るための努力をしたい。

最後になりましたが、今年度も大勢の方々よりご支援、ご協力をいただき代表チームの活動ができますこと、感謝申し上げます。



日本女子代表チーム
コーチ 花輪希美圭

【所見】

今回の合宿も6名という少人数での実施であったが、全員が同じ部屋で生活を共にしたこともあり、コート内外を通じて選手同士のコミュニケーションは良好で、互いに声を掛け合いながら合宿生活を送る様子が見られた。

選手一人ひとりに今年度の目標を確認したところ、全員が「アジア大会優勝」を挙げており、チームとして明確で共通した目標意識を持って合宿に臨んでいたことがうかがえた。練習への取り組み姿勢も前向きで、指示や助言に対して意欲的に反応し、主体的に取り組もうとする姿勢が随所に見られた。

6人という人数で練習を回す必要があり、体力的には厳しい状況であったが、4日間を通して大きな怪我や体調不良により練習を離脱する選手が出なかった点は非常に評価できる。合宿前から各自がコンディション調整を行い、しっかりと動ける身体を準備して参加できていたことが確認できた。さらに、疲労が蓄積しやすい合宿後半においても、ルーズボールへの反応やディフェンス強度を落とさず、最後まで粘り強くプレーする姿が見られた。こうした点から、技術面だけでなく、メンタル面および体力面においても、これまでの活動を通じた着実な成長が感じられる合宿であった。

【課題】

課題は、継続して2ポイントシュートの決定率向上が挙げられる。合宿中に改めて世界選手権の映像を

全員で確認したが、フリーでシュートを打てる状況であっても、シュートを選択せずドライブで仕掛ける場面が多く見られた。対戦国の多くは、日本のようにボールマンに対して高いプレッシャーを継続してかけられる選手を揃えているわけではなく、日本のスピードのあるドライブに対応するため、比較的距離を取ったディフェンスを行う傾向がある。そのようなディフェンスに対しては、無理にドライブを選択するのではなく、思い切って 2 ポイントシュートを打ち切り、確実に決める力を身につけることが重要であると考えられる。

また、合宿では仲間同士によるゲーム形式の練習が中心となるが、実際の国際大会では日本と同様の守備強度やプレイスタイルを持つチームは少ない。各対戦国のディフェンスの特徴を正しく捉え、「どの状況で、どの攻撃が有効か」を判断できるようになることが必要である。そのためにも、合宿中に視聴した大会映像を改めて見直し、相手のディフェンスの立ち位置や距離感を具体的にイメージしたうえでシュート練習に取り組むことが、その精度向上につながると感じた。

もう一つの大きな課題は、体力面のさらなる向上である。ディフェンス、リバウンド、ルーズボールに対する意識は全体として高く、ハードにプレーしようとする姿勢は十分に見られるが、疲労が蓄積してくると反応が一步遅れる場面が散見された。国際大会では 1 試合 10 分間、高い集中力を保ったまま走り切ることが求められるため、その基礎となる体力づくりは引き続き重要なテーマである。

今後は、ランニングによる持久力の向上に加え、今回の合宿で実施したインターバルダッシュのような高強度・短時間のトレーニングにも継続的に取り組み、試合終盤までパフォーマンスを落とさずに戦い切れる体力の強化を図っていきたい。

終わりに、今回も合宿実施にあたって、清水ナショナルトレーニングセンターの皆様にも多大なるご協力をいただきました。早朝から夜遅くまで素晴らしい環境で快適に練習ができましたことに、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



日本代表チーム
トレーナー 山崎美和子

【所見】

男子は 4 名の新加入選手を迎え、また女子は昨年度と同じ顔ぶれで今年度の活動がスタートした。男子チームは日程前半で韓国からチームを招待し合同練習、スクリメージを実施、後半は静岡の社会人チームに協力をいただき 5 人制・3 人制のスクリメージを実施した。

合宿初日はコンディションチェックからスタートし、新加入の選手のヒアリングは特に念入りに行った。男女共に大きな持ち込みの負傷はなかったが、慢性的に痛みがある選手が数名いた。女子選手では初日に息苦しさなど呼吸器系の症状を訴える選手が数名いたが 2 日目以降の訴えはなく練習に参加できていた。

男子選手がランニングによって土踏まずの皮がめくれ、フィルムシートにて被覆しクッションパッドにてサポートをいれ対応、女子選手では繰り返し動作による両母趾球への負荷で痛みの訴えがありクッションパッドにてサポートを入れ対応をした。

合宿後半になると男女ともに疲労度が高くなる様子はあったが、選手たちの中で以前よりもセルフケアをする習慣がついてきており、自身で対処ができるようになってきていると感じた。

男女ともに大きな怪我はなく全日程を終了することができた。

【合宿を終えて】

今合宿は磯崎トレーナー・杉本トレーナー・海野トレーナー、スポーツナースの原田さんも日ごとにサポート

に入り、選手へのケア対応、セルフケア指導などを伝えてくださっている。指導されている選手は継続して実施して欲しいと願う。

女子は昨年 12 月の合宿からより実践的な練習になり強度もハードになっているが、全選手ともに体力もついてきており成長が見取れた。

男子選手も自身の課題への取り組みによって成果が出始めている選手が増えてきている。また反面変化がない選手もあり、取り組み方や指示の出し方などを工夫しないといけないという反省点がある。男子の新加入の選手についてはヒアリング時にトレーニングやストレッチなどのケアを覚えてもらったことがないという声があったため、合宿内でストレッチの仕方を伝えた。またフィジカル面では持久力が低い選手に対して、まずはランニングの指示を出しており、持久力の向上を目指すこととする。

合宿初日のミーティングで今年度の強化方針及び目的・目標がヘッドコーチより伝えられている。各選手はそれぞれ代表選手としての自覚を持ち、日々の練習・トレーニングに励んでいく必要がある。選手のすべてを管理することは難しいが、コンディションなどについて相談しやすい環境づくりをすること、またコーチ陣と情報共有しながら目的達成に向けてトータル的なサポートをしていく所存である。

最後となりますが、合宿期間中の食事や活動しやすい環境を整えてくださった清水ナショナルトレーニングセンターのスタッフの皆様、選手・スタッフ分のヤクルトの提供をしてくださった中央静岡ヤクルト販売株式会社様、男子チームに胸を貸してくださった社会人チームの皆様へ心より感謝申し上げます。



2026 年度 FID 日本男子・女子代表チーム

サポート企業・団体・サポーター様

株式会社デンソー 様

株式会社アイズ・カンパニー様 株式会社 GRACE 様
株式会社 FIELD MANAGEMENT STRATEGY 様
株式会社 CIJ ネクスト様

株式会社笹森様 株式会社誠行社様 わだ薬局様
株式会社ドリームビレッジホールディングス様
株式会社サンシップ様 山崎自動車様
合同会社寿老人様 株式会社はちはち様

株式会社ほけんの 110 番様 株式会社田辺電業社様
横浜税理士法人様 ナトリ電設株式会社様
株式会社ジャパン・スリーブ様 酒と肴さえぐさ様
有限会社ベルセブン様 株式会社ヒライ様

株式会社 TLH 様

株式会社凸様 NPO 法人チームふくしま様 株式会社アルバ様
ムーングローウダイナー様 イワテックカンパニー様 サンオブチカル株式会社様

石上 岳彦様 野田 悟様 須藤 昭宏様 須藤 昂矢様 杉本 正毅様 中村 昭男様
山田 謙治様 折笠 常弘様

野崎 龍華様	伊勢 徹様	奥野 智佐之様	蜷川 稔様	足立 哲哉様	古川 雅司様	古川 千秋様	前田 陽介様
笹森 勝義様	田名 哲也様	草山 堅吾様	中山 克良様	高橋 徹様	南原 勝一様	鶴谷 伸之様	岩村 浩人様
鶴岡 将文様	大野 敦史様	和田 洋幸様	小森 健太郎様	小林 千夏様	武ノ内 由紀子様	小玉 隆史様	
大塚 一義様	辻元 由美様	川口 正高様	川口 美樹様	大村 亜理様	角田 正博様	菊地 敏治様	富田 順也様
肥後 達也様	杉本 弘毅様						

多大なるご支援ご声援、連盟一同感謝申し上げます

